

持続可能性と無常観 Sustainability and Impermanence Views

神奈川県立保健福祉大学 学長 中村丁次
Teiji Nakamura, President of Kanagawa University of Human Services

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。」鎌倉時代前期、鴨長明の「方丈記」の一部である。日本人の「無常観」を表現したものとしてよく引用される。この時代、後白河天皇と崇徳上皇の対立による保元の乱、平清盛と源義朝の対立による平治の乱、さらに大飢饉や大地震が起り、世の中は戦乱、混乱、衰退が相次ぎ末法思想が広まっていた。すべての存在は変化し、不変、不滅のものはないという「無常観」を民衆は受け入れたのである。新型コロナウイルスへの不安と緊急事態宣言により日常生活が崩壊する現在に似ている。

不安定な時代に誕生したこの「無常観」は日本人の精神文化に根付き、世に常は無く、今栄光に輝いている者もいつかは衰退し、今どん底にいる者もいつか這い上がり栄光を手に入れることができるとする人生観にもなっている。そのために勝者は謙虚に、敗者は未来を信じ努力する人生訓にも発展した。

なぜ、日本人はこのような哲学を持つようになったのであろうか？

日本列島は4つの断層が重なり、地震と火山噴火が繰り返され、さらに1年に何回も台風により多くのものが吹き飛ばされ、日常生活が一瞬に崩壊する特徴を持っている。そのために「この世に常は無い」と信じるようになったのだと思う。そして、被災した時には、人々が助けあう「絆」を大切に、復興の過程ではその技術を発展させ、科学技術を進歩させた。日本人は、無常な社会を受け入れながら、精神的にも、技術的にも発展させ、日常を取り戻し、できる限り持続可能な社会が創造できるように努力してきたのである。

現在、世界の合言葉にもなった「持続可能な社会の創造」とは、異常と正常を繰り返す無常な社会の中で、いつまでも平和で、健康で、文化的な生活ができる世界が続くことを願った人類の叫びであると思っている。我が国においては、鎌倉、戦国時代と国内の戦いが続いた後に、平和で文化的な江戸時代が訪れた。しかし、これも300年近くしか持続せず、大正、昭和には海外との戦が起り、現在は戦後約70年となった。国際的に不安定になる中で、未知なるウイルスや地球環境の変化により、無常な社会が再び起ころうとしている。従来のような末法思想で諦めるのではなく、人類の英知と科学の力により平和な日常が持続できる社会が何とか創造できないかと願っている。

特に、保健医療福祉を専門とする私たちに課された役割は大きい。持続可能な保健医療福祉とは、集団と個人の健康とウェルビーイングのあらゆる側面を向上させ、環境への負荷が小さく、誰一人も取り残すことなく、手頃な価格で、安全で、公平で、そして文化的なサービスが継続的に受けられる社会の実現を目指すことではないかと密に思っている。